

7 令和
年度版

警察職員による

被害者支援手記

警察庁

犯罪被害者等施策推進課

発刊にあたつて

犯罪被害に遭われた方やそのご家族は、犯罪による直接的な被害だけでなく、その後、直面する様々な困難により、言葉にできないほどの辛い思いに長く苦しめられます。そこで、周囲が、犯罪被害者の方々の置かれる状況や心情を受け止め、寄り添い、途切れなく支援の手を差し伸べることが求められます。

この冊子は、全国警察の第一線において、犯罪被害者の方々の支援活動に当たる警察職員から寄せられた「手記」の一部を、警察庁犯罪被害者等施策推進課が取りまとめたものです。

ここに収めた手記には、犯罪被害者の方々がどのような状況に置かれ、どのように苦しんでいるのかの一端が表れているほか、個々の犯罪被害者の方々の声を受け止め、時には共に涙を流しながら、その求めるところに応じて、関係機関とも連携しながら、寄り添い続ける警察職員の生の姿が記されています。

この冊子が、幅広い国民の皆様にご覧いただき、犯罪被害者の方々の置かれる状況や心情への理解を深めるとともに、再び平穏な生活を営むことができるよう、その周囲の一人一人にできることを考えるきっかけとなることを願っております。

令和七年十二月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 江口 有隣

目

次

ある御家族から教わったこと

「あの日何も出来なかった私」

変わってしまった日々のなかで

被害者と向き合ってみて

被害者に寄り添うということ

笑顔が戻るまで

警察本部勤務
警部

……………
1

警察本部勤務
技術職員

……………
5

警察本部勤務
巡査長

……………
8

警察署勤務
警部補

……………
10

警察署勤務
巡査部長

……………
13

警察では、

◎ 警察に対する相談については、各都道府県警察の総合窓口につながる

警察相談専用電話「#九一一〇」番

◎ 性犯罪被害相談については、各都道府県警察の性犯罪被害相談電話につながる

全国共通番号「#八一〇三（ハートさん）」

により受け付けています。

ある御家族から教わったこと

（あの日何も出来なかった私）

警察本部勤務 警部

御家族は、理不尽な交通事故で小学生のA君を奪われました。A君のほか、御両親、中学生のお兄さんの4人家族。仲良しで笑いの絶えない家族でした。A君は照れ屋でやんちゃ。お兄さんはしっかり者。お母さんは兄弟でつくづく性格が違うと感じておられました。

御家族は野球が大好き。お父さんは地元少年野球チームの指導者、兄弟は選手として所属し、A君は常にお兄さんが目標でした。お母さんもチームの活動を支えていました。当時、私は警察本部の被害者支援係に所属しており、御家族と出会いました。この痛ましい事故から歳月が流れましたが、御家族とは時々近況を報告するなどの御縁をいただいております。

当時のことは決して忘れることはできません。これから、事故を通じて御家族から教わった大切なことについて触れていきます。

ある日の朝、きちんと登校班列を守り、通学路を普段通り登校していたA君達を、路外逸脱した大型車が突然襲いました。そして、何の落ち度もないA君達の未来が一瞬

にして奪われたのです。

私は事故の一報を聞き、事の重大さに胸騒ぎを覚えながら上司と現場に向かい、悲惨な光景を目の当たりにしました。

現場は国道です。大型車は歩道を横切り民家物置に突っ込んだ状態で停まっており、周囲には瓦礫や子供のランドセル等が散乱していました。周辺は警察官だけでなく、家族や学校関係者、その他多くの人々が集まり混乱を極めていました。当初は事故の概要すら分かりませんでした。徐々に被害状況が明らかになるにつれ、私の心は絶望感に包まれました。

そして、救出されたA君は、残念ながら現場で死亡が確認されてしまい、病院に連れて行ってもらえませんでした。これは、御両親にとつて辛いことであり、刑事裁判の意見陳述でもA君を病院に連れて行けなかったことに触れるなど、後々まで苦しんでおられました。

私も御家族と同じ境遇であつたら、可能性を信じ、傷ついた家族を病院に連れて行くことを強く願うはずです。このような出来事一つ一つが、何年も御家族を苦しめる原因になるということを改めて考えさせられました。

その後、A君は警察署に運ばれ、検視されることになりました。検視が終わるまでの間、警察署の控室で御両親は待機することになりました。二人とも憔悴しきっており、お母さんは机に突っ伏したまま茫然として泣いておられました。

A君は元気に「いってきます。」と家を出て、そのまま帰らぬ人になってしまいました。御両親の心情を思うと、同じ子を持つ親として心が痛み、かける言葉もなく立ち尽くし、何もしてあげられない己の無力を感じました。

嘆き悲しむ御両親に私は当時何と声をかけたのか、正直あまり覚えていません。何をしてもA君は戻ってこないという厳しい現実を前に、どのように声をかけてよいのかわからず、御遺族が利用できる制度等をまとめた「被害者の手引」の説明をしたことは覚えています。御両親が極限の状態にあるなか、「被害者の手引」の話をしたことは配慮が足りなかったと今でも後悔しています。

検視が終わるまで数時間かかり、御両親も辛く長い待ち時間を耐えておられました。そしてようやく検視が終了し、御両親はA君に会えることになりました。

私が御両親に御案内することをお伝えした際、お父さんは机に突っ伏しているお母さんに「俺が行ってくるよ。」と伝えると、お母さんは顔をあげ「私も行く。私〇〇のお母さんだもん。」と言い立ち上がりました。お母さんの言葉に私は涙が出ました。

私は御両親を霊安室に御案内したところ、扉の前で警察署の被害者支援担当者である女性警察官が待っていました。

女性警察官の案内で扉を開け、A君の前まで御両親を案内し、顔にかけられた布が取られA君の顔を見たとき、御両親はA君の名前を叫びながら泣き崩れました。A君の顔には傷があり、それを見たお父さんがA君の名前を叫びな

がら「これ絶対いてーよ。」と泣き叫び、お母さんも泣き続けていました。この世でこれ以上の絶望はないという光景で、私も涙が止まりませんでした。

何もしてあげられない自分に茫然とし、そばにいたことしかできず、極限状態の御両親を前に、声をかけることも体を支えてあげることもできず、何もできませんでした。本当に私は何のためにここに居るのだろうと情けなくなりました。

A君は検視終了後、御自宅に帰りましたが、私はただ見送ることしかできず、何もできなかった私の一日は終わりました。しかし、御家族の一日はまだ続いていたのです。

後日聞いた話では、A君と御自宅に帰ったあと、報道関係者が多数取材目的でやってきたそうです。A君が自宅に帰っても棺から出られない現実を前に、心身とも憔悴していた中、取材を受ける気のない御家族にとって辛い出来事だったそうです。この件も、当日御自宅に伺う等してあれば把握できたはずであり後悔しています。

事故により、御両親だけでなくお兄さんも大きく傷つきました。

お兄さんは事故の前日、A君と兄弟喧嘩をしたそうです。A君が亡くなったことを聴き、お兄さんは「まだ仲直りしてないのに。」と泣き崩れ、何も手に付かなくなったそうです。

このように御家族の一日に終わりはなかったのです。

後日、A君の葬儀を前に、御家族はA君が身につけてい

たランドセルや手提げバッグの返還を希望されたため、捜査担当者に御家族の御意向を伝えました。捜査担当者は御家族の意を汲み、すぐにランドセル等を返すことが決まりました。ランドセル等は土砂等で汚れていたため、少しでも綺麗な形で家族の元に返すため、土砂等をふき取り可能な限り綺麗にしてお返ししました。

私はA君の持ち物をお返しする際立ち会っておりませんが、御家族は持ち物を大事そうに受け取り、ランドセルの中にあった見せていないテストを見つけて泣き笑いました。血の付いた服を見たお母さんは「痛かったね、○○…」と呼びかけておられたそうです。

私はこの話を聞き、胸が締め付けられる気持ちになるとともに、「ランドセルを早く返してもらいたい」という御家族の要望には、少しでも応えられたのかなと感じました。警察では証拠品とされている遺品が、御家族にとってはかけがえのない物であることを痛感するとともに、被害者に寄り添い、要望に耳を傾けることの大切さも学びました。

その他御家族は、A君が亡くなったため行方役所や学校等様々な手続きについて「どこに相談してよいか分からなかった。」「手続きは○○が生きてきた証を一つ一つ消しているようで辛かった。」と当時の心境を話しておられました。この話を聞き、御家族の要望に沿った情報提供ができなかったことを申し訳なく思いました。

御家族はA君の葬儀終了後、刑事裁判にも被害者参加制度を利用して参加しました。法廷では、お父さん、お母さ

んがA君に対する思いを涙ながらに訴えておられました。

辛い日々を送られていた御家族にとって、今まで経験もない刑事手続きのほか、刑事裁判にも参加し、法廷で思いを訴えることは本当に大変だったと思います。さらに御家族は民事裁判、道路交通法改正に向けた活動等もされていきました。これらの活動全てがA君のため、二度と同じような被害者を出さないために御家族が懸命にやってこられたことです。

事件発生後から法改正まで実に3年以上の月日が流れました。そして現在まで含めると10年以上の月日が流れています。その間、私は御家族と何度もお会いする機会をいただきました。

私が一番御家族に会って感じることは、どんなに月日が流れようと御家族の悲しみは変わらないということです。普段は明るいお母さんも、A君の話になると今でも涙を流しておられます。

あと、お母さんが話しておられたことですが、家族の中でも悲しみの受け止め方は全く違うそうです。A君の御家族は、事件発生後から今日まで、それぞれがA君の事故と向き合ってこられました。

そのような中、私にとって嬉しい出来事がありました。

それは昨年、立派に成人したお兄さんを連れとお母さんとお会いした時のことです。お兄さんは現在大学で研究に打ち込まれているとのことであり、とても輝いて見えました。お母さんも嬉しそうにお兄さんを見つめておられました。

た。お二人の姿を見て、私も幸せな気分になりました。しかし、A君の事故という悲しい過去は消えません。この辛い現実のなか、御家族は現在も頑張っています。

私はA君の事故に関して反省してばかりです。しかし、いくら考えても過去の反省を挽回することはできません。事故当時、嘆き悲しむ御家族を前に何もできなかった私。

それでは、今後、どうするべきなのか。未だに明確な答えは分かりません。お母さんも言っておりましたが、同じ家族でも受け止め方は全く違うし、事件事故も同じものはありません。

正解は分かりませんが、今私が思うことは、気の利いた台詞は必要なく、被害者一人一人に寄り添い、被害者が抱えている問題に耳を傾け対応していくことが大切だということです。

警察は捜査活動などで、被害者の意に添わない対応を取らざるを得ないこともあります。捜査の必要性を説明し理解を得る努力も必要です。それが御家族を通じて私が感じた、私なりの被害者支援に関する答えです。

私はA君や御家族から学んだことを決して無駄にしたりありませんし、警察だけでなく社会で生活する一人一人にも、被害者やその御家族の心情や被害者支援の必要性を知っていただきたいと願っています。

御家族と同じ境遇にも遭ったことのない私が、何を偉そうなことを言ってるんだと自分でも思いますが、私はこの気持ち大切に生きていきたいと思っています。

変わってしまった日々のなかで

警察本部勤務 技術職員

犯罪被害者支援の広報啓発活動の最中、「私みたいなおばちゃん被害に遭うことなんてないわね。」と、広報啓発用のパネルに目をとめた女性から声を掛けられました。

私自身、犯罪被害とは新聞やニュースで見る出来事で、自分の日常とは遠くかけ離れたものだと思っていました。

変わらずに訪れる日々の中で、少なからず不安や心配を感じることがあるかもしれませんが、自分が犯罪被害に遭うかもしれないという危機感を抱きながら生活をしている方はほとんどいないのではないかと思います。そのような思いを抱いて生活することは、警戒心や緊張状態がずっと続いて、心も体もとても疲れてしまうことだと思えます。しかし、犯罪被害に遭った後、警戒心や緊張状態がずっと続いてしまうことがあります。

そして、犯罪被害は多くの場合、突然に起こります。通勤や通学のためにいつも行き帰りをしている路上で、日常生活を営む自宅や職場、学校、いつも行く商業施設やたまたま出かけた場所で、ただ歩いていただけで、ただそこにいただけで、年齢や性別、生活の仕方や思い、考え方などまるで関係なく、犯罪被害に遭うことがあるのです。

私は、犯罪被害に遭われた方やそのご家族、ご遺族の方々とお会いする時に、今からお会いする方はどのような思いだろうかと想像をしますが、毎日変わらずにやっていると信じていた平穏な生活を奪われた恐怖や怒り、無念さなどの思いを想像しきれることは到底ありません。

犯罪被害に遭われて間もなく、警察で色々なお話を聞かせていただく時、涙をこぼしながらやつの思いで話をされる方やあふれる感情を時に抑えながら、時にはその感情をあふれさせながら話をされる方など犯罪被害に遭われた方の様子は一人一人違います。その中には、まるで犯罪被害などなかったかのように淡々とお話をされる方もいらっしゃいますが、それは決しておかしなことではありません。

あまりにも強い衝撃を受けると、心が凍り付いたように、感情や感覚がマヒしてしまうことがあるのです。

しかし、心が凍り付いて、感情や感覚がマヒしてしまうことは、傷ついていないということではないのです。

淡々とお話されていても、その手は硬く握り込まれていたり、体が小さく震え続けていたり、小さな物音に対してびくつと驚かれたりする様子を目の当たりにすることもあります。そして、少しずつ時間が経過して、心の凍り付きが溶けていく中で、しだいにいつもどおりの日常生活が送れなくなっていく姿を目の当たりにすることもあります。

これまでどおりの日常生活の中で、思い出したくないのに犯罪被害のことがふと思い出されてしまったり、犯罪被害を思い出させるようなものや場所などを避けるように

なったり、眠れない、御飯が食べられないと心身の調子を崩されたり、暗いところや一人でいることが怖く感じられたり、他人が信じられず外に出られなくなったりと様々な変化が起こり、その方を苦しめます。

ある方は、犯罪被害に遭ったことで、情熱を持っていた仕事への意欲がわなくなったり、大切な家族に気持ちをおぶつけてしまうようになったりした自分自身に対して、「そんな自分が嫌いだ。」と涙をこぼされました。

犯罪被害によって大切な方を傷つけられたご家族は、犯罪被害に遭われた家族にどのように接したらいいのかと悩んだり、犯罪被害のことを語ろうとしない家族が何を考えしているのか分からずに困惑したり、やり場のない激しい怒りや悲しみ、後悔などを抱え込んでしまうこともあります。

犯罪被害に遭った家族を思えばこそ、事件や事故と向き合うように促すご家族もいらつしゃれば、事件や事故と距離を置いて少しでも安らかに生活できるように配慮するご家族もいらつしゃって、同じ家庭で一緒に時間を過ごしてきた家族でも、それぞれの思いがすれ違ってしまつて、時には大きく衝突してしまうこともあります。

犯罪被害によって大切な方を失われたご遺族には、怒りで顔を真っ赤にしながらか何が起きたのかを努めて冷静に担当者に問い続ける方、涙を流して崩れ落ちながら御遺体と対面をされる方、促されるまま淡々と対応される方、おつけようのない怒りや悲しみがあふれ出してしまふ方など、様々な思いを抱かれた方々がいらつしゃいます。

犯罪被害によって大切なご家族を失い、静かに「いつものように帰ってくるんじゃないかと思う。」「現実感がなくてとても信じられない。」とこぼされたり、様々な手続の中で「何度も殺されたようなものだ。」「できるならば犯人を同じ目に遭わせてやりたい。」と強い怒りをにじませて、悲しみを訴えたり、「家族がいなくなった暗い家に帰るのが嫌だ。」と生活の中に確かにあつた幸せな時間が失われたことに直面されたりなど、ご遺族の方々それぞれが抱く、言い表しきれない思いや、やりきれない気持ちに触れることがあります。それは被害に遭われてから何日、何か月、何年という時間が流れても色あせることのない、生々しい気持ちですし、揺れ動き続ける気持ちでもあります。

犯罪被害に遭われた方やそのご家族、ご遺族の方にお会いすると、目の前にいらつしゃるこの方をこれ以上傷つけずに一緒にいるためにはどうしたらいいのかと考えぬいても、絶対に正しいと確信しきれない、本当にわずかなことしかできなくて、自分の無力さを痛感します。

そのような中で、共に働く犯罪被害者支援室の方々は、皆優しく寄り添ってくださる方ばかりで、犯罪被害に遭われた方々からあふれ出る激しい感情に触れ、自分の無力さ、理不尽な社会への憤り、やり切れなさなど表しきれない感情が湧き出る時には、何気なくそばにいて、さりげなく声をかけてくださるので、自分自身の気持ちを表現し、客観的に見つめ直す機会につながって、私自身の気持ち

何度救われたことか分かりません。

また、犯罪被害に遭われた方々から、「気にかけてくださってありがとうございます。」「一緒にいてくれて心強かったです。」といった暖かいお言葉をいただくことがあります。こちらを労ってくださるお気持ちが届くくらいにありがたくて、胸がいっぱいになります。

そのような周りの方々からの暖かい心遣いが私の支えになっっています。そして、その心遣いに恥じないようにという思いが私を突き動かします。

犯罪被害に遭われた方々の思いや私にできることを考え続けながら、今、目の前にいる犯罪被害に遭われた方々に向き合い、その言葉に耳を傾け、その思いに寄り添うことが、犯罪被害者支援なのではないかと思っています。

周りの方々の暖かい気持ちを糧に、犯罪被害に遭われた方やそのご家族、ご遺族の方々の気持ちがおほんのひとときでも和らぐように、できることを考え続け、それを確かに行動できるように気持ちを引き締め、犯罪被害者支援に向かいたいと思っています。

被害者と向き合ってみて

警察本部勤務 巡査長

私は、警察官として交通事故現場に多く携わってきましたが、その中でも特に印象に残っている交通事故が、午前7時頃に信号設備のない丁字路交差点の横断歩道を横断中の小学校一年生の男の子が大型ダンブにはねられた後、礫過され、亡くなった事故です。

私は出勤した後、いつものように朝の業務を終え、一息ついた途端、110番指令で「横断歩道を横断中の歩行者がはねられ、現在意識がない模様。現場急行願う。」との一報が入ってきました。

私が急いで現場に駆けつけると、そこには道路脇で泣き崩れる女性と、横断歩道を過ぎた先に停止していた大型ダンブ、その横で携帯電話を片手にどこかへ電話をしている男性、そして救急隊に運ばれる小さな体がありました。

ほんの数分前まで生きていた命が今はいもう戻らないという現実に見場にいた誰もが言葉を失っていました。

亡くなったのは小学一年生の男の子でした。

道路向かい側にある学校へ登校するため、横断歩道を横断していたところ、尊い命が奪われたのです。

ピカピカの買ってもらったばかりのランドセルを背負

い、将来どういった仕事に就き、どういった人と結婚するのかなど自身も親も楽しみであったはずが、突然の出来事で一瞬にして叶わぬ夢となってしまいました。

大型ダンブを運転していた男性は、運転中にスマートフォンで操作に気をとられ、歩行者に気付くのが遅れたのです。あまりに唐突で理不尽な事故。

その現場で、私は一警察官として、被害者の尊い命を守ることができなかった自分に強い無力感を抱きました。その後、私は遺族対応の担当となり、ご両親に死亡の一報を伝えるという、非常に辛い重い任務を担うこととなりました。

警察官として度々この役目を経験してきましたが、息子を亡くしたご両親に「息子さんはお亡くなりになりました。」と伝える時の胸の痛みは、このような場面を何度経験しても慣れることはありません。

ご両親は最初、私の言葉の意味を理解できない様子で、何度も「え？嘘ですよね？」と聞き返され、やがて母親はその場に崩れ落ち、父親は感情を堪えるような表情で目に涙を浮かべながら現実を受け止めきれずにいました。その時の光景は今でもはっきりと目に焼き付いており、思い出すだけで心が痛くなります。

私は、その光景を目にした時、自分が何気なくこなしていた仕事は、被害者やその家族の人生が大きく変わる瞬間に立ち会っているのだということを強く実感しました。

以後、私は捜査の合間を縫ってご家族と何度も面談を重ね、寄り添う意識を持って、事故状況の説明などしてい

うちに、ご両親は次第に心を開いてくださり、息子さんの思い出話をしてくれるようになりました。

ある日、警察署を訪れた母親が、ぼつりと私につぶやきました。

「警察の人にこんなことを言っても仕方ないかもしれないけど、私は、息子に行ってらっしゃいと言ったのが、今日で最後になるとは思ってもいなかったです。自分や自分の家族が事故で亡くなるなんて…。テレビの中だけの話かと思っていました。」と。

私は、その言葉を聞いた時、何を言っても慰めにはならないと思い、何も言うことができませんでした。

だから、黙ってうなずくことが私にできる精一杯の「寄り添い」でした。

その後もご家族は悲しみの波に揺られながらも、少しずつ日常を取り戻そうとしていました。

そんなある日、父親が「息子のために何かできないか、同じ思いを誰にもしてほしくない。」と相談に來られました。その言葉に、私は胸を打たれました。

失われた命は戻らないけれど、その命が他のだれかを守るきっかけになるのなら、私もできる限り支えたいと思い、交通安全講話の時などに今回の事故によって失われた命のこと、残された家族の心情等について、私の方から話すのはどうか提案したところ、快く承諾してくださったので、私が講話に行った際は、今でも今回の事故のことを話すようにしています。

このご遺族の心遣いが、多くの地域住民の心を動かし、地域全体が安全への意識を高めるきっかけになったと思います。この一連の経験を通じて、私は「支援」という言葉の重さの意味を理解できたと思います。

支援とは、単なる業務ではなく、遺族のどうすることもできない感情を受け止め、言葉に耳を傾け、共に泣き、共に悩み、前を向こうとする、その関係の中にこそ、本当の支援があるのだ、警察官である私は、「法と秩序を守る」とが職務であるが、それ以上に人の心に寄り添う姿勢が求められるのだ」と感じました。

特に交通死亡事故は、突然日常を奪う非常に残酷な現実です。被害者やそのご家族の人生は、事故の瞬間から一変します。だからこそ、私たちは「現場の通報があったから業務の一環として対応する」だけではなく、「関わり続ける」姿勢が大切なのだと思えました。

また、支援とは決して一方通行ではありません。

私自身も多くの被害者や遺族の方々から大切なことを教えていただきました。

命の重さ、家族の絆、そして、寄り添う力の大切さ。

私はこの経験を胸に、今後も一人の警察官として、そして一人の人間として、交通死亡事故の悲しみと向き合いながら、支援の手を差し伸べていきたいと思っています。

「同じ悲しみを二度と繰り返さないために。」

この言葉を心に刻み、日々の職務に向き合っていくつもりです。

被害者に寄り添うということ

警察署勤務 警部補

私は、警察署で被害者支援係長として勤務しており、毎年、被害者支援連絡協議会を開催している。

関係機関、団体等と連携、協力して途切れない犯罪被害者支援を行うのが目的である。

実践的なシミュレーション訓練を行い、それぞれの立場でどのような支援が可能であるか等を検討するなどしているが、実際に各団体等と機能的な連携が図れているかという、まだまだ発展途上である。

被害者の置かれている立場は様々でその時々でニーズも違う。

被害者がどんな支援を必要としているのか。

警察官が作成した事例で考えるより、被害者の生の声を聞いてもらい、どんな支援ができるか考えてもらう方が、被害者支援がより身近に感じられるのではないかと、私の頭の中にふつふつとこんな考えが湧き上がってきた。

被害者が本当はどんな気持ちなのか、どんな状況に追い込まれてしまうのか、こんな時、どんな助けを必要としているのか。

今回の連絡協議会がこのことを知る良い機会になれば、

これからの支援活動に大いに役立つと思った。

そして、私自身のためにもなると思ったからだ。

被害者の立場に立って寄り添うのは、本当に難しい。

心の傷を少しでも受けとめてあげたいと思う反面、私の言動が被害者を傷つけていないか、ちゃんと支援できているのだろうかと考えると、不安になり、どんどん臆病になる。

最近、そういう自分がいたから、被害者の気持ちを聞いてみたいと思った。とはいえ、被害当時の辛い記憶を思い出す作業に協力してくれる被害者がいるだろうか。

私は、日頃から被害者支援に真摯に取り組んでいる交通捜査係のA部長に自分の気持ちを伝え、協力を依頼した。すると、A部長は、数年前に夫を交通事故で亡くしたご遺族のBさんと今でも連絡を取り合っているとのこと、協力してもらえるか聞いてみると言ってくれた。

この事故は、裁判が長引き、最近になってやっと裁判が終わったとのことであった。

突然夫を亡くしたBさんは、子供達とどんな大変な時間を過ごしてきたんだろうと思うと、被害者支援連絡協議会への協力は負担になるであろうし、無理だと想像ができた。

数日後、A部長から、連絡があった。

Bさんの返事は、OK。

ただ、たくさんの方の前で話すことは難しいので、事件直後から現在に至るまでの気持ちの変化や自分が置かれた状況、家族の状況、こんな支援があったら助かった、こん

な支援に助けられた等を手記として提出してくれるとのことであった。

この手記を被害者支援連絡協議会で活用してくださいうことであつた。

私は、こんな大変な作業を引き受けてくれるなんて、A部長は、無理にお願いしたのではないかと少し不安になつた。

後日、Bさんと会い、自己紹介とお礼を伝えた。

Bさんは、

「A部長のおかげで、私達家族は、今、元気でいられるんです。本当にA部長の支えがなかったら大変なことになると思つたんです。だから、A部長からの依頼であれば、お受けします。」と言つた。

私は、Bさんからこんなに感謝され、信頼関係を築いているA部長に頭が下がる思いであつた。

数日後、Bさんから手記を受け取つた。

その手記には、事故の連絡を受けた時から、生活が一変した状況が詳しく書かれていた。

自分の仕事のこと、子供達の学校のこと、運転すること、も怖くなり、家族みんなが体調を崩し、精神的にも追い詰められていく状況、心ない言葉に人間不信になつたことなどが生々しく書かれていた。

そんな状況の中、同僚からの気遣いや近所の方々が除雪や買物等を手伝ってくれたことでとても助かつたと感謝の

言葉も書かれていた。

そして、何より、Bさんを支援していたA部長のことが書かれていた。

『事故からずっと、定期的に連絡をくれ、話を聞いてくれたA部長がいたから、泣きながらでも、なんとかこまでやってこれた。突然夫を亡くし、生きている意味があるのかと思つた時もあつたが、そんな時も話を聞いてくれたのは、A部長で、話していなければ、どうなつていたかわからない。裁判の時も、隣にいてくれたのはA部長で、心強かつた。』

Bさんの手記を読み、最近の私は犯罪被害者支援係でありながら、被害者と真摯に向き合つていなかったことに気付いた。

私は、被害者に「何かあつたらいつでも連絡ください」と言つていたが、辛い状況の中、連絡するという行為さえも負担であつたに違いない。

私の方から連絡していたら、きっとBさんのように話したいことがあつたり、聞いてもらいたいことがあつたのではないか、そして、話すこと、聞いてもらうことによって、心がほんの少しでも軽くなつただろうに。

被害者支援連絡協議会で、Bさんの手記を活用させていただき、協議会は無事終了した。

会員の方々からは、このような状況の時、私達はこんな支援ができます、こんな協力ができます、この貴重なご意見を参考に今後に生かしていきたいとの意見が出た。

関係機関、団体等会員の方々のためにと考え、Bさんにご協力いただいたが、私が一番学ばせてもらう貴重な機会となった。

被害者に接することに臆病になっていた私に、被害者に寄り添うとは、何か難しいことをしなければならないわけではなく、被害者が話せるようにそばにすることだと、Bさんから勇気づけられた気がした。

協議会終了後、A部長は既に転勤していたので、私一人でBさんにお会いした。

お礼を伝えると、

「A部長のお願いだったから引き受けました。子供達なんて、A部長が引越した場所に、私達も引越そうよ、なんて言ってるんですよ。」
と笑顔で話してくれた。

あの時のBさんの笑顔が忘れられない。

笑顔が戻るまで

警察署勤務 巡査部長

「○○ちゃん、よく笑うようになったよね。」

と話しかけた私に、照れくさそうにしながらも、嬉しそうな表情で

「はい。私もそう思います。」

と彼女は答えてくれました。

これから記すのは、私が過去に担当した、性犯罪被害者の女の子に笑顔が戻るまでのお話です。

彼女が性犯罪の被害を受けたのは当時高校を卒業したばかりのことでした。希望に満ちあふれていた彼女は、将来の夢を叶えるため、慣れない仕事に毎日奮闘していました。しかし、被害直後からの彼女は、自分の将来や夢について全く考えることができなくなり、日常生活では過剰に男性に怯えて暮らすようになってしまいました。

この事件を認知したのは、彼女の友人が彼女の異変に気づき、警察署に相談をしてきたことがきっかけでした。

当初、彼女の心は堅く閉ざされ、心配する友人達の声も耳に届かない状態でした。被害の詳細を口にすることを嫌がり、警察への届け出を頑なに拒んでいたとのことでした。それでも、彼女の友人や恩師達の根気強い説得で、何と

か彼女は警察署に足を運び、被害申告をすることができました。

彼女が受けた被害というのは、社会人になったばかりでまだ何もわからず、仕事も不慣れな環境の中で、頼りにしていた職場の上司から受けた性犯罪でした。

性犯罪の被害者が警察に届け出るということは、彼女だけに限らず、私達が思っている以上にハードルが高いことです。二度と思い出したくない出来事を思い出し、他人に話さなければならぬという、被害者にとって大きな苦痛を伴う作業になります。それは本当に辛いことだったに違いありません。

ですが、彼女は被疑者のことや忘れたい当時の記憶を思い出し、恐怖を感じながらも当時の話を聞かせてくれました。

そんな彼女の姿に、「何とか私も応えてあげたい」という気持ちはありましたが、当時、彼女のために何をしてあげればいいのかかわからず、思い浮かぶのは、しっかり彼女の話を聞いて、時に彼女の気持ちを代弁し、犯人を絶対に捕まえるといったことでした。

しかし、被害当時のことを聴取するという作業は想像以上に困難で、彼女は事情聴取や再現見分の度に涙を流し、その日の夜はうなされて眠れない、といった症状が現れるようになってしまいました。

それでも彼女は「私がこんなに苦しんでいるのに犯人は何食わぬ顔で生活していると思うとくやしいから頑張ります」

す。」と言ってくれ、最後まで捜査に協力してくれました。

当時、私はそんな彼女に「絶対に犯人を捕まえるからね」と言い続けていたことを覚えています。

この事件は程なくして被疑者を逮捕することができ、彼女は安堵の表情を浮かべました。しかし、笑顔を見せることはありませんでした。

そうです。犯罪被害者というのは身体のみならず、心にも大きな傷を負うため、犯人が捕まったら終わりといった単純で簡単なものではないのです。辛い記憶は一生消えず、すべてリセットされることはありません。

また、彼女は警察での事情聴取が終わった後にも、検察庁での事情聴取があり、それが終われば今度は裁判への出廷となり、被害者の不安は犯人逮捕の後にも続きました。

私自身、被疑者を検挙出来たことで、捜査員としての任務は果たせたと思っていましたが、被害者の心の支えにはなれたのだろうか、という不安を感じていました。

そんなある日、彼女から1本の電話がありました。

「お願いがあるのですが、検察庁に行くことになったので一緒に行ってもらえませんか。」

という内容でした。

彼女は自分一人では心細いので、私に付き添ってほしいと連絡をくれたのです。私はこの連絡をもらい、彼女が私を頼りにしてくれていることが分かり、嬉しかったことを覚えています。

その後、彼女は度々近況報告をしてくれるようになり、

彼女と私の間に信頼関係が生まれてきたと感じてきました。

そんなある日、彼女から電話で

「これまででは仕事をすることはカウンセラーさんに止められていたけど、体調もよくなったから今度アルバイトの面接に行こうと思っています。」

と言われました。

その声は明るく、私には何か吹っ切れたような、やる気に満ち溢れた声に聞こえました。

この時は自分のことのように嬉しかったです。

そして数日後に、彼女から「無事に面接に合格し、晴れてアルバイト店員として働くことが決まった」との報告を受け、一緒になって喜んだことを記憶しています。

私は、彼女が犯罪の被害で長い間苦しんできたことを思い、やっと彼女が新しい一歩を踏み出したことを嬉しく思うと同時に、彼女の喜びと不安の入り交じった合格報告の声を聞き、どうしても様子が気になり、直接会いに行きました。その時の彼女は、私の心配をよそに晴れ晴れとした表情をしており、これまでとはまるで別人のように、何度も笑顔が出るようになっていました。

私の不安は一気に消え、思わず、「○○ちゃん、よく笑うようになったよね。」と伝えました。

すると彼女は「はい。私もそう思います。」と照れながら笑顔で答え、続けて「これからは自分の身は自分で守れるようになりたいから護身術を教えてください。」と言ったのです。

彼女のこの言葉から前向きな力強さを感じ、「もう大丈夫。笑えるようになってよかった」と心から思いました。

続いて、彼女から「今まで本当にありがとうございました。これまで付き添ってもらったりして本当に心強かったです。」という言葉をもらい、彼女が立ち直る手助けができたことを実感するとともに、被疑者検挙とはまた違った「被害者支援」という任務を果たせた安堵感と達成感を感じました。

その後、彼女は裁判で意見陳述をすることになったのですが、法廷での彼女は、涙声ではありましたが堂々と意見を述べ、その立ち向かう姿に心が震えました。

彼女への連絡は判決を伝えることで最後となったのですが、彼女に寄り添ってきた日々は、私自身、被害者支援の重要性を再認識することができ、貴重な経験となりました。

私達は犯罪の被害に遭われた方を「被害者」と呼びます。一言で「被害者」といっても、十人十色で人それぞれ境遇、考え、感じ方は異なり、私達警察官に望むことも様々です。

犯罪被害者の当事者ではない私達は、被害者の心情を察することはできません、同じ立場にならなければわからない、計り知れない感情や恐怖を知ることが難しいです。

被害者支援には決まりや正解がある訳ではありません。それでも、相手が今何を望んでいるのか理解することに努め、被害者の気持ちに寄り添うことが、何より大切なことなのだと思付かされました。

私はこれから先も多くの被害者に接する機会があると思

います。その度に、私にはどんな支援ができるのかを考え、被害者の気持ちに寄り添いながら、最後には明るい笑顔を取り戻してもらえる。そんな支援をしていきたいと思っています。

